【土木史研究　第14号　1994年6月　自由投稿論文】

電力土木の歴史－第２編　電力土木人物史（その２）

正会員　稲松技術士センター　稲松敏夫（技術士）

History of Electlic civilEngineering
－PartⅡ History of electlic Civil Engineer－

概　要

by Toshio Inamatsu.

筆者は先に第１回～第11回にわたって、電力土木の変遷と、電力土木に活躍した人々を中心に各河川の水力開発の変遷について述べ、その中で電力土木に一生を捧げた人々のうちの代表的人物60名を発掘して、その成果をまとめ得た。

さらに昨年はその中25名の人々の業績を詳述して第２編・電力土木人物史として、２名（知久清之助、伊藤令二）について発表し、今回はその２として数名を発表する。　（明治～昭和期電力土木、開発した人）

（Ⅰ．分類　人物史　Ⅱ．分類・河川・エネルギー）

1．人物史

(1) 北松友義

平成２年４月東北大学構内にて（97歳）

(イ)　はじめに

昭和58年９月、筆者は東北地方の水力開発の変遷をまとめるにあたり、東北の只見川開発に当初から最後まで生命を打ち込んで一生を捧げられ、現在も100歳で仙台にお住いの当時90歳の北松翁に御子息北松治男氏（当時東北電力取締役土木部長、現在東北開発コンサルタント社長）同道で仙台のホテルでお会いする機会を得て、直接北松翁からお聞きすると共に、資料をお借りして、東北地方の水力開発の変遷とその開発に一生を捧げた北松友義翁等、10数名の功績を発掘する事が出来た。

更に平成５年８月、北松友義氏の女婿吉田勝英氏（電源開発水窪建設所長及び開発工事専務取締役、金沢市内川発電所工事で筆者と３年間建設工事に挺身した）より、北松友義氏著「私の歩いた道」を送っていただいて氏の足跡の偉大さと、御子息北松治男氏から送っていただいた老御夫婦の写真をもとにして本稿をまとめ得た。改めて、北松友義氏、北松治男氏、吉田勝英氏に心から御礼を申し上げる。

(ロ)　北松友義の年譜

明治28年５月	和歌山県に出生
大正３年２月	東京筑地工手学校土木科卒業
大正３年８月	東京電灯入社　技手補
昭和12年４月	技師に昇格
昭和16年10月	工務部土木課長代理
昭和17年	逓信大臣賞を受ける
昭和17年４月	日本発送電入社 建設局土木部技師
昭和17年７月	関東水力事務所建設課長
昭和18年	発明奨励賞を受ける
昭和19年４月	建設局仙台出張所土木部長
昭和20年４月	東北支店土木部工事課長
昭和22年２月	東北支店土木部長
昭和22年４月	参事に昇格
昭和24年７月	東北支店電源開発委員会委員
昭和25年６月	嘱託、参事、東北支店土木部長 東北支店只見川開発事務所長兼務
昭和25年11月	福島県電力振興調査委員会 委員委嘱

昭和26年５月　東北電力へ入社、理事
建設局土木建設部長
兼　只見川開発事務所長
昭和26年６月　只見地方特別
地域総合開発審議会委員委嘱
昭和26年10月　福島県総合開発調査局
専門委員委嘱
昭和26年11月　柳津発電所建設所長
兼　片門発電所建設所長
昭和27年６月　建設局会津現業部長
兼　柳津発電所建設所長
兼　片門発電所建設所長
昭和27年８月　上田発電所建設所長
兼　本名発電所建設所長
昭和28年９月　電源開発会社
田子倉建設所所長代理
昭和28年12月　東北電力建設局
会津現業部附部長待遇
昭和29年５月　東北電力監査役
昭和29年６月　電源開発会社
田子倉建設所所長代理
昭和30年　藍綬褒章を受ける
昭和31年６月　電源開発会社
田子倉建設所所長
昭和35年６月　退任

(ハ)　東京電灯会社時代（大正３年８月～昭和17年３月）

27年間の東京電灯会社時代、笛吹川建設工事、上久屋、大鹿窪工事の設計、猪苗代第３、第４建設工事、小野川工事、秋元工事、信濃川建設、工事監査、猪苗代湖面低下工事建設所長等、10数カ所の発電所建設工事に挺身し、積極的に工事の推進に新しい提案を実行して成功した功績は、実にすばらしい。
神原信一郎博士に17年間指導を受け、大島満一、熊川信之、加藤貢、中瀬真二等の先輩、同僚と力を合わせて、日本的な工事を完成させた。

小林一三社長、新井副社長、岡部、福田、安藏常務等が当時の東京電灯の経営幹部であった。

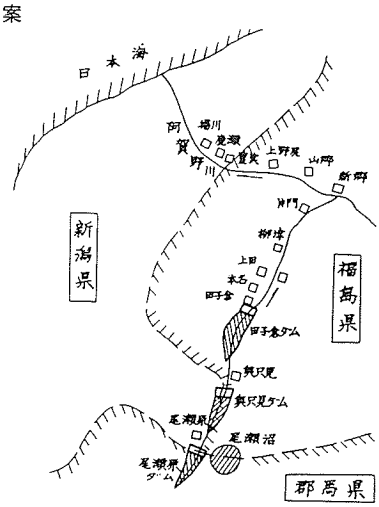
(ニ)　日本発送電会社時代
（昭和17年４月～昭和26年５月）

９年間の日本発送電会社時代は２年間の東京で水力建設課長。後の７年間は仙台へ移って仙台出張所の土木部長、東北支店土木部長として、沼の倉、宮下、沼沢沼、先達、生母内建設工事の責任者として、努力するとともに昭和21年より只見川開発計画の立案、調査に新機軸を開いた。

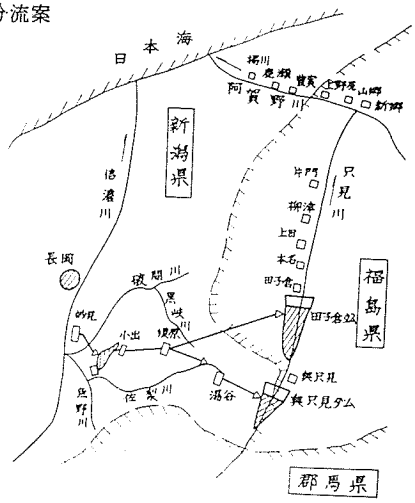
調査隊長（土木課長）後藤壮介、五十嵐信一、吉田勝英等が協力した。

(ホ)　東北電力会社時代（昭和26年５月～昭和29年５月）

本流案



分流案



只見川開発計画本流案は、東北電力会社（立案者北松土木部長）が提案し、それに対し新潟県が分流案を提案し、昭和23年冬比較検討委員会が行われた。

その後、学職経験者で委員会を組織して、内海清温、久保田豊、安藤新六、荻原俊一等で検討したが決着がつかず、吉田首相がO.C.I.（米国海外技術顧問団）に依頼しエリック・フロワー氏が23年11月末、両案の現地視察を行い、更に26年公益事業委員会（松永安左衛門委員長）がO.C.I.技術団を招き、両案について検討せしめた。東北電力からは平井弥之助常務取締役、北松土木部長、矢崎土木部次長が案内した。その結果は「本流治ひに開発すべきである」との結論であった。

27年9月電源開発㈱が創立し、只見川の上流部の開発は同社により行われることとなった。同社は田子倉及び奥只見発電所に早急に着手せんが為、先づ福島、新潟両県の争いを解決しようとし、官庁及び各方面の協議を得て、遂に円満解決を見たものである。

「只見川は本流治水に開発する。ただし、将来、信濃川沿岸に水不足を来した場合は、奥只見貯水池より平均1.3㎥/Sの水量を分水する。新潟、福島両県は、この条件を承認して、抗争6ヶ年に亘る問題も解決を見たのである。

東北電力会社の3ヶ年北松友義は、土木部長兼片門、柳津建設所長、さらに、上田、本名建設所長として建設工事の第一線で活躍した。

(ヘ) 電源開発会社時代

（昭和28年9月より昭和35年6月まで）

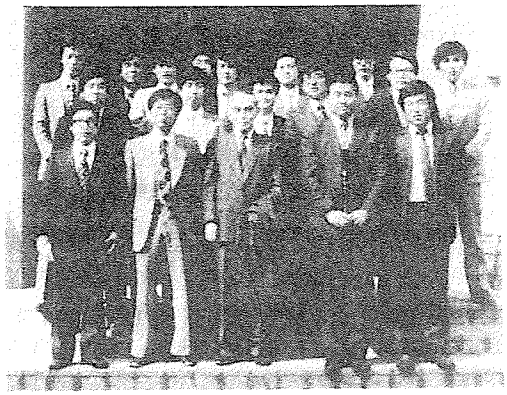
電源開発時代の7年間は田子倉建設所所長代理及び、田子倉建設所長として、日本的なダムを完成させ、退任した。只見川計画の中心的田子倉ダムを始め、一貫した計画を立案した昭和21年から田子倉ダム建設所長として完成させた昭和35年6月まで一貫して14年間只見川開発に積極的に挺身して完成させた偉業には頭が下がる。

(ト) 私の北松友義観

昭和58年9月筆者が仙台で直接北松友義と御子息北松治男氏にお会いして、電力土木に一生を捧げられた当時90歳の翁の意志強固な顔貌と、その話し振りと、さらに女婿吉田勝英氏から送っていいただいた翁の自叙伝「私の歩いた道」を読み返すことによって、大正3年より昭和35年の約50年間にわたる電力に一生を捧げた翁の数々にわたるエピソードを読むにつけ、それぞれの立場で第一等を自覚して努力精進した生涯と、建設工事、用地交渉等に身心を投げ打っての努力精進によって、道は必ず開けるとの硬い信念によってあらゆる困難な道を切り開いて、立派な成果をあげたことを目の前に感得して、驚嘆と畏敬の念を禁じ得なかった。

特に北松友義氏、北松治男氏、女婿吉田勝英氏等電力土木一家として3人も盡力された事について、感銘深い。

(2) 目黒雄平



近畿大学にて

(イ) はじめに

昭和24年から26年まで2年間目黒雄平が日本発送電北陸支店土木部長時代富山で筆者が直接の部下として、御指導を受けた。

最近に及んで目黒雄平に、日本電力、通産省、日本発送電、関西電力と生涯の大半を師事した鳥飼精一氏（技術士）と面識を得、資料写真等多大の御協力を得て、本稿を執筆し得た。目黒泰さん（夫人）御子息目黒徹雄氏（新潟鉄工所理事）女婿氷見晴彦氏（酒井鉄工所勤務、元関西電力社員）女婿小林正几氏（法政大学工学部土木工学科教授、元関西電力社員）鳥飼精一氏に心から感謝申し上げる。

(ロ) 目黒雄平の年譜

明治34年9月　新潟県六日町に生まれる

大正12年	新潟高等学校卒業
大正15年	東大土木工学科卒業後、日本電力㈱入社。黒部川第二発電所建設工事、猫又谷水路橋（通称目黒橋と呼ばれる）の設計工事を担当。
昭和11年	日本電力瀬戸第二発電所建設所（飛騨川筋）土木課長
昭和13年	日本電力退職
昭和13年	逓信省電力管理準備局 逓信省電気庁第２部水力課長 軍需省を経て。
昭和19年	日本発送電㈱総裁室水力試験所長
昭和20年	日本発送電、近畿支店土木部長
昭和24年	日本発送電、北陸支店土木部長
昭和26年５月	関西電力㈱土木部長
昭和26年12月	関西電力㈱建設部長
昭和29年	副支配人建設部長
昭和33年	退職
昭和33年10月	㈱鹿島常務取締役
昭和41年２月	㈱鹿島大阪支店顧問
昭和44年４月	近畿大学工学部客員教授に迎えられる。
昭和44年10月	黄授褒章
昭和45年10月	土木工学科科長 大学院創設に努力
昭和49年９月29日	歿
（満　74歳）	

追贈勲四等瑞宝章

(ハ)　日本電力時代（大正15年～昭和13年）

13年間主として、黒部川節の電源開発特に昭和10年黒部川第二発電所の建設工事に挺身した。

特にいまでも目黒橋として著名な黒部川第二発電所の猫又谷に架る水路橋（昭和11年10月竣工、長スパンのトラス構造で、黒部峡の名物として今もその姿を留めている）

昭和11年飛騨川節瀬戸第２発電所建設所土木課長として２年間、宮川所長の片腕として活躍した。

(ニ)　逓信省水力課長時代（昭和13年～昭和19年）

６年間主として、逓信省水力課長として全国の水力建設事業の指導者として活躍した。

(ホ)　日本発送電時代（昭和19年～昭和26年）

７年間、主として、水力試験所長、近畿支店土木部長、北陸支店土木部長として水力建設の幹部として部下の指導に当った。昭和24年から昭和26年の２年間北陸支店土木部長時代（筆者）も、直接の部下として指導を受けた。当時、黒部第４発電所の調査等も手がけた。若かりし頃に設計、施工した黒部川第２発電所の目黒橋や黒部川第２発電所の建物の自然美とマッチした設計、色彩について開発と環境の問題をよく指導を受けたが、今日の時点の環境問題と開発工事の事を考えると、目黒雄平は先見の明があったとつくづく考える。

(ヘ)　関西電力時代（昭和26年～昭和33年）

７年間主として、関西電力の土木部長、建設部長として、黒部川第４発電所工事、黒部第４ダム工事の建設に至るまでの調査計画に大きな力を與えられた。

(ト)　鹿島建設時代（昭和33年～昭和49年９月）

16年間主として、常務取締役、顧問として斯界の業務発展に盡力された。

(チ)　近畿大学教授時代（昭和44年～昭和49年）

５年間、教授、土木工学科科長として学生の指導と大学院の創設に盡力された。

44年10月黄綬褒章を受けられた折には、郷里新潟県六日町小学校にピアノを贈られて、その慶びを共になされたなど優しい人柄が偲ばれてならない。

尚、長女裕子さんは氷見晴彦氏（元関西電力社員、酒井鉄工所勤務）

次女靖子さんは小林正几氏（法政大学工学部土木工学科教授元関西電力社員）

長男徹雄氏は㈱新潟鉄工所理事

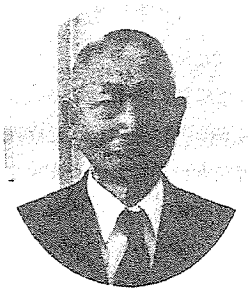
とそれぞれ電力界等に親子二代挺身した事も感銘深い。

(リ) 私の目黒雄平観

大正15年大学卒業後、日本電力に入社してより、逓信省、日本発送電、関西電力、鹿島、近畿大学と50年間それぞれの立場で、緻密な計画と実行力で、一生を貫き通して来られた道程を拝察し、特に昭和24年から2年間直接筆者が指導をうけた日本発送電北陸支店土木部長時代の“開発と環境”特に黒部川電源開発と環境の問題については今も尚頭にこびりついていて忘れられない。また近畿大学教授としての学生の指導等についても、鳥飼精一氏の長年にわたる御指導等の話を伺っても、実に部下を思い、心から学生を愛した指導という面で頭が下がる。

今日の開発と環境問題を考えた場合誠によき先達に指導を受けたものと心から感謝する。

(3) 高桑鋼一郎



(イ) はじめに

平成3年6月7日名古屋大学で行なわれた土木学会土木史研究発表会に筆者が「電力土木の歴史－各水力開発の変遷（その10）」と題し、戦前の朝鮮、満州国、台湾等の電源開発と、戦後の東南アジア、韓国、中国、ペルー、トルコ等の海外電力開発と、その水力開発に盡力した人々の歴史を発表し、席に戻った所、かつて日本発送電富山出張所時代にお世話になった高桑鋼一郎翁にお眼にかかり、元気なお姿を拝し、お聞きすると96才とのこと。会が終って、名古屋駅まで送っていただき、名古屋駅で夕食を御馳走になり富山へ帰った。当日の懐旧話と、後日送付していただいた「土木学会、四十年誌－中部における土木学会史」及び「名古屋工業大学、土木工学科八十年誌」を参考にして本稿をまとめた。

(ロ) 高桑鋼一郎の年譜

明治27年12月	名古屋市に生れる。
大正6年3月	名古屋高等工業学校土木科卒業
大正6年4月	名古屋電灯に入社 矢作川串厚仮発電所、木曽川賎母同大桑、同大井各水力発電所建設に従事
昭和9年7月	木曽川笠置ダム式発電所建設所主任
昭和14年5月	日本発送電㈱中部水力建設所土木課長 木曽川常磐、同兼山、同三浦ダム式、天神川晝神、同飯島の各発電所建設に従事
昭和18年12月	建設局富山出張所土木部長 庄川成出、神通川打保、九頭竜川、市荒川、常願寺川常願寺川第一、黒部川黒薙の各発電所建設に従事 九頭竜川五条方発電所建設所長 常願寺川有峰ダム発電所建設所長を兼務する。
昭和23年	日本発送電㈱東海支店土木部長
昭和26年5月	電力再編成により中部電力㈱に引継入社する。
昭和29年	電源開発㈱入社
昭和33年	電源開発㈱辞職
昭和35年2月	開発工事取締役
昭和36年3月	旭工事㈱代表取締役社長
平成3年12月	歿。
昭和31年12月	黄綬褒章受章
昭和42年4月	勲五等双光旭日章受章

(ハ) 名古屋電灯時代（大正6年～昭和14年）

22年間主として、矢作川、木曽川等4ヶ所の水力発電所の建設に従事した。

(ニ) 日本発送電時代（昭和14年～昭和26年）

12年間中部水力建設所土木課長として4年間、富山出張所土木部長5年間、東海支店土木部長として

3年間それぞれ多くの水力発電所建設の責任者として挺身した。特に筆者が直接部下として指導をうけたのは、昭和18年から23年までの5年間で、その間、庄川、成出、神通川打保、九頭竜川、市荒川、常願寺川常願寺川第一、黒部川黒薙、九頭竜川五条方建設所長、常願寺川有峰ダム発電所建設所長として多くの水力発電所の建設工事の調査、設計、工事について入社（昭和17年）当時の筆者が電力界に入って当初の指導者として多大の指導を受けた。

昭和17年筆者が入社当時の富山出張所長（後に北陸支店長）は、安藤新六、鈴木長治、永田年で、土木部長は、足達正俊、高桑鋼一郎、目黒雄平、北陸電力（昭和26年）になって、鵜飼孝造常務、和澤清吉取締役土木部長、大林士一有峰ダム建設所長、並びに大橋康次氏（後北海道電力副社長）、吉田登氏（後関西電力副社長）等にお世話になった。

(ホ) 中部電力時代（昭和26年～昭和29年）

3年間中部電力創生期の幹部として各水力発電所地点の調査、開発に挺身した。

(ヘ) 電源開発時代（昭和29年～昭和33年）

4年間電源開発創生期の幹部として各水力発電所地点の調査、開発に挺身した。

(ト) 開発工事取締役（昭和35年～昭和36年）

2年間開発工事取締役として各水力発電所地点の地質調査等の業務開発に挺身した。

(チ) 旭工事代表取締役社長（昭和36年～平成3年）

20年間、地質調査業旭工事代表取締役社長として主として名古屋東海地区の地質調査業の開発に挺身した。

昭和31年12月黄綬褒賞さらに昭和42年4月勲五等双光旭日章の受章の栄に輝いた。

(リ) 私の高桑鋼一郎観

平成3年6月の名古屋の出会い、96才のかくしゃくした翁の風貌に久し振りに接し、昭和18年～5年間にわたる日本発送電富山出張所土木部長時代の直接の御指導と、その後数回、富山の筆者を訪ねて来られ面接した思い出を総合して、63年に及ぶ電力土木に一生を捧げた翁の誠実さ、謙虚さと仕事への熱意を思うにつけ、直接、間接に長年指導をうけた事、特に筆者が電力界に入った最初の5年間の指導は今もって脳裡に鮮やかによみがえってくる。

(4) 久保田豊

(イ) はじめに

平成3年日本工営社長池田紀久男氏を尋ね、戦時中の朝鮮、鴨緑江水電の水豊発電所等の電源開発について、電力土木の歴史（その10）に発表する為、前日本工営社長久保田豊氏の資料をもとにして作成したものと、平成5年鴻野五八氏（元鴨緑江水電水豊建設所所員、現在大東設計コンサルタント㈱会長、技術士）を尋ねお借りした、久保田豊（永塚利一著）及び久保田豊伝（伊東孝著）並びに水豊建設所時代の写真、工事記録、資料を参考にして本稿をまとめた。

池田紀久男社長及び日本工営の関係者、並びに鴻野五八会長には心から御礼申し上げる。

(ロ) 久保田豊の年譜

明治23年4月	熊本県阿蘇郡錦野村に生まれる。
明治36年4月	熊本中学校入学
明治41年4月	第五高等学校入学
大正3年9月	東京帝国大学土木工学科卒業
大正3年10月	内務省渡良瀬川改修事務所に奉職
大正9年1月	内務省退官
	茂木本店商工部に転職
	天竜川電力開発の責任技師となる
大正9年6月	久保田工業事務所設立
大正14年1月	朝鮮水電㈱設立

	工務部長代理、赴戦江第一発電所着工つづいて、第二、第三発電所着工
昭和４年９月	赴戦江第一発電所竣工
昭和５年10月	赴戦江第二発電所竣工
昭和５年11月	赴戦江第三発電所竣工
昭和６年	朝鮮窒素建設部長となる
昭和７年３月	赴戦江第四発電所着工
昭和７年12月	赴戦江第四発電所竣工 遂次長津江第１～第２～第３発電所竣工
昭和12年12月	満州、朝鮮鴨緑江水電㈱設立常務取締役 鴨緑江水電㈱水豊発電所着工
昭和16年12月	水豊（第１期）完成
昭和17年	朝鮮鴨緑江水電社長 満州鴨緑江水電理事長となる。 その後虚川江第３、第４発電所竣工鴨緑江の雲峰義州開発に着手
昭和20年11月	京城から内地に引揚ぐ
昭和21年３月	新興産業建設社　（後日本工営と改名）設立
昭和28年９月	最初の世界一周出発 ビルマに立寄りバルウチャン開発計画を示唆 以後、インドネシヤ、ベトナム、メコン河開発、韓国電力等海外電力開発を推進する。
昭和38年４月	海外技術コンサルテング、企業協会設立、会長となる。 以後、国内外の電源開発工事の指導に生涯を貫く。
昭和61年	病歿　96才

(ハ)　朝鮮水電時代（大正14年～昭和20年）

戦前の20年間朝鮮に渡り鴨緑江水豊発電所、雲峰、義州開発、及び赴戦江４発電所長津江３発電所、虚川江４発電所等を完成させ、日本の水力技術の一廻りスケールの大きい発電所をつぎつぎ完成させた。特に水豊発電所、水豊ダムの工事完成は当時世界的、画期的工事であった。

(ニ)　日本工営時代（昭和21年～昭和61年）

戦後の40年間、日本工営を設立してより、国内は勿論、インドネシヤ、ビルマ、ベトナム、メコン河開発、韓国電力、台湾電力等世界各地の電源開発に「ミスター、久保田」の名前で献身的な貢献をしたことは余りにも有名である。

(ホ)　私の久保田豊観

昭和33年	カンボジア王国功労勲章
昭和37年	ビルマ共和国鉱工業大臣章
昭和40年	ラオス国勲二等百万像勲章
昭和46年	ラオス国統治徽章銀賞
昭和48年	ベトナム共和国勲一等公共事業運輸通信勲章
昭和57年	ネパール王国勲二等、ゴルカ、ダッシン、パフ章
昭和59年	韓国産業金塔勲章
昭和60年	勲一等旭日大綬章（日本）

以上の如く東南アジア、韓国、日本等の勲章を数多く授賞され、久保田の名は日本よりもむしろ世界で知られているといわれる程である。

朝鮮の鴨緑江の水豊ダムを始めあまたの開発と、東南アジア等世界各地の開発等「誠実」に一生を貫いた久保田豊の偉業に頭が下がる。

(5)　参考文献

1）北松友義口述「私の歩いた道」
昭和38年５月発行（発行人　永塚利一）

2）高桑鋼一郎の略歴
昭和54年３月発行　中部における昭和土木史－土木学会中部支部

3）久保田豊
昭和41年４月発行　永塚利一

4）久保田豊伝
伊藤孝、コンサルタント列伝
平成３年度“建設コンサルタンツ”

（以　上）